

高校生を含む十八歳未満の方の閲覧を禁止いたします。

この物語はフィクションであり、

実在する人物・団体・事件等には一切関係がありません。

なお物語に出てくる表現等はすべて創作です。

犯罪行為を助長させるものではありません。

絶対に真似をしないでください。

無断転載、複製、ウェブへのアップロードを禁止します。

いいなと思っていた終バ

スの運転手さんが

私を帰す気ゼロです!

～限界社畜 OL 暗い車庫特 別 点 検でおもらし絶頂させられま
す～

体験版

「……あー、無理。マジで無理。人間が週5日、1日14時間労働するとかになかのバグでしょ……」

深夜24時15分。

街灯が寂しく照らすバス停で、私はぐったりとベンチに腰を下ろしていた。

連日の超絶残業、上司からの理不尽な要求。終わらないタスク。私の脳ミソはすでに限界を迎えており、今なら「2＋3＝うどん」と言われても「へえー、讃岐かな？」と納得してしまいそうなレベルでIQが低下している。

全身を地面に投げ出して全てを放棄してしまいたい衝動と必死に戦いながら、早く帰りたい一心でバスを待っていた。

ほどなくして闇夜の向こうから、『市街地循環』と表示を掲げたバスが滑り込んでくる。

（神様仏様、バス会社様……！）

プシュー、とドアが開く。

私はフラフラとステップを上がり、スマホをIC読み取り機にかざそうとした。

その時だ。

「——今夜もお疲れ様です」

運転席から聞こえたのは、低いけど甘さもある、聞き心地の良い声。ちらりと視線をやると、制服をバシッと着こなした、いつものイケメン運転手さんがいた。

爽やかな目元、しゅつとした鼻梁。制帽の下には少し癖のあるダークブラウンの髪。運転席に座っているからわかりにくいけれど、背は高そうだし、身体も引き締まっていて、まるでモデルか俳優が片手間で路線バスを運転してます。みたいな雰囲気がある。

「あ。ありがとうございます……」

（あ……。連日の残業ですっかり覚えられてる。恥ずかしい……。でも、今日もかつこよ。目の保養♡ ありがとう、バス会社様）

私が深夜の終バスに乗るたび、かなりの高確率で当たっている運転手さんは、たしか名前を茂木彰^{もてぎあきら}さんという。

名前をすっかりチェックしているあたり、私も大概だと思う。だけど、瀕死の社畜だからこそ、こういう癒やしは貴重だ。

少しだけ生き返った気分で、私はバス後方の席に座った。
どきりと体重を預けた瞬間、全身の筋肉がフニャフニャに解けていく。

ゆらゆらと揺れる車内。

他に乗客はなく、私はスマホをポチポチしながら、ベッドに潜り込んでぐっすり眠りたい気持ちでいた。

明日はやっとお休みだ。だけど、家のことが色々溜まっている。起きれるのか、私。

思考がどんどん後ろ向きになる中、身体は正直に休息を求め始めていた。

降りる停留所までは、まだ距離がある。

少しだけ——ほんの少しだけ、目を閉じようと思った。

（あ、やばい……。ねむたい……。）

心地よい振動が、抗えない眠気へと変わっていく。

ここで寝たら、起きれないかもしれない。

それはわかつている。

わかつているのだけど、意思とは裏腹に、まぶたは鉛のように重く、思考は暑い日のアイスクリームみたいにどんどん溶けて——私はとうとう意識を手放した。



「……………ん……………」

どれくらいの時間が経っただろうか。

まぶたの裏側に広がる深い闇の中で、私はふと、下腹部のあたりに『異常な熱』を感じて意識を浮上させた。

なんか……………股間が、むわっと温かい。

服の上から熱湯を入れた湯たんぽでも押し当てられているかのような、濃密で局所的な熱気。

それと同時に、下半身の奥のほうがズクズク♡ と不快ではない、

むしろ背筋が痺れるような気持ちよさに苛まれていた。

（あれ……？ なにこれ……？ 夢……？）

あまりの疲労からの欲求不満で、そういう、いわゆるえっちな夢を見ているのかもしれない。

私は半分眠りながらも、太ももをぎゅっと閉じようとした。

しかし、なぜか閉じられない。

むしろ、太ももの間でなにかがもぞもぞと動いている感触がある。

（なに……？）

違和感を覚えた私は、必死に重いまぶたを持ち上げて、現状を視認しようとした。

まず見えたのは、真っ暗なバスの車内だった。

車窓の外の景色も街灯もない暗がりになっている。

しかも、エンジンの振動も止まっていて、車内は静まり返っている。

（えっ!? バス? そうだ、私、帰ってる途中で——! ここどこ!? 車庫!?)

自分の股間のあたりに視線を落としたとき、私は、なにが起きてるのか理解するまで1秒、2秒、3秒と時間がかかった。

「……………え?」

自分の太腿が、左右に大きく割り開かれていた。

深く腰掛けたシートの上で、私の脚はM字に近いくらい開かされている。

「ッ……………!?!」

その開かれた太腿の間に、がっしりとした男の体軀が割り込んでい
る。

制帽も取って、制服のネクタイを緩めていたけれど、いつものイケ
メン運転手さん——茂木彰さんだ。

「……………ジュっ♡　ちゅ、ふ……………♡」

茂木さんは私の両腿をしっかりと大きな手で固定し、深く頭を下げ
ていた。

どこに顔を埋めているかと言えば、私の股間だ。

パンストの上から、私のデリケートゾーンをまるごと口内に含み込
むようにして、『はむ、はむ』と熱心に噛み含んでいる。

「っえあ……………あ……………っ!？」

むずむずとした気持ちよさの正体は、これだった。

パンストのナイロン越しに伝わる、茂木さんの温かい唇と舌の圧力。彼が息を吐くたびに、むわっとした吐息の熱がパンストを通り抜けておまんこの肌を直接くすぐってくる。

「ん……ちゅっ、ハぁ……ッ♡」

まるで上等なお菓子でも味わってるみたいに、丁寧に、けどどこか必死な力加減で、私のおまんこをパンスト越しに貪っている。

（えっ……!? ええええええええっ!? なになになになになにつ!? な、なにが起き、起きてるの!? 茂木さん、なにしてっ!?）

思考回路が一瞬でオーバーヒートを起こす。

喉からこぼれたのは、「降ろしてください」でも「助けて」でもな

く、情けない問いかけだった。

「ひあッ……!!? あつ、あのっ！ なに、なにしてるんですかあっ!!?」
私の声に反応して、股間に埋められていた茂木さんの頭が、ピタリと動きを止めた。

ゆっくりと顔が上がってくる。

内腿を撫でていたサラサラの髪が離れ、暗闇の中で彼の整った顔立ちがぼんやりと浮かび上がった。

緩く跳ねた髪を少し乱し、その瞳は暗がりの中で怪しく爛々と輝いているように見えた。

「ああ……。目が覚めましたか？」

ふふ、と極上の爽やか笑顔。

乗車時に見せてくれていた、あの「今夜もお疲れ様です」の100点満点のイケメンスマイルだ。

「にこっ、じゃないですよおッ！」

私は思わず後ろへ這い出そうとしたが、茂木さんの大きな手が太腿をガッチリと掴んで離さない。男の人って感じの腕力が恐ろしい。

「な、なんで車庫にいるんですか!? ていうか、なんで、あの、こんなこと……!」

「んふふ♡ あなたの降りる停留所でお声がけはしたんですよ？ ですが、ぐっすり眠ってらして。終点を過ぎても起きないので、どうしようかと……。そうして可愛い寝顔を見ていたら我慢できなくなってしまうして……」

えへへ、と照れ笑いする茂木さんは、どう見ても『つい出来心で』みたいなノリだ。

え？ コレが？ コレが出来心？

「最初はちよつとだけ匂いを嗅がせてもらうだけにしようと思ってたんですが。……なんかもう、どんどん歯止めが利かなくなつて、それからもう……こうなつたら、眠つてる間に味わい尽くそうかなつて……」

「は……？」

さらっととんでもなく怖いことを言われた気がする。

思考停止している私の顔を、茂木さんはうっとり見つめている。

「え……？ 匂い……？ 味わい尽くす……？」

頭の片隅に残った意識が必死に警報を鳴らしている。

待って、待って待って待って。

この人見た目は最高にイケメンだけど、中身めちゃくちゃヤバい人なんじゃ……!?

「あつ、あのっ！ 茂木さん。とりあえず離れてください！ 私、帰ります！」

そう言って、茂木さんの頭を押し返そうとするが、びくともしない。それどころか、すごく嬉しそうになっことと微笑む。

「僕の名前、知っていてくれたんですね。嬉しいなあ」

「あつ、ちが……。そういう意味じゃ……。っ！」

「そんなに遠慮しないでください。……。もう、僕たちは『仲良し』な

んですから♡」

「だから、ちがうって……ッ！ え、やめっ！」

私の静止を無視して、茂木さんは再び顔を下に向け、脚の間に身を屈める。

「やっ、ほんとに！ だめっ！ やめてくださ……ッ!?」

慌てて足を閉じようとするが、やっぱり茂木さんの両手が太腿の付け根あたりをホールドして、私の脚が閉じれないようにしている。

「ん……♡ んむ♡ はっ、はあ、はあ……♡ パンスト越しにもあなたのいい匂いがする♡」

「ひっ！ やだ、やだやだやだっ！」

「すうう……♡ ふう……♡ くらくらする……っ♡」

「嗅がないでえ……ッ！」

茂木さんは私の静止を無視して、鼻の頭を私の股間にぐりぐりと押し当て、深呼吸した。

お腹の底からせり上がるような、重くて深いため息がパンストにしみ込んでいく。

変態だ——こんなの、完全に変態じゃないか。

（ちがう！ 全然ちがう！ 私が思ってた癒し系の運転手さんと全然ちがう！）

「んふ……♡ はあ……♡ ずっとこうしたかったんです♡」

「いやいやっ！ 離れてくださいってば！」

私の拒絶なんて聞こえないみたいに無視して、茂木さんは蕩けた表

情のまま、縦スジに指を沿わせた。

「……あ。ここ、透けてきちゃってますね」

「見ちゃ、やっ……！」

「ちよつと失礼しますね」

「え？」

ビツッ！

「あっ……！」

ぎゅつ、と引つ張られたかと思うと、ナイロンが引き裂かれる音が鳴った。

茂木さんはその大きな手で、私のパンストの股間部分——さっきまで『はむはむ』と食み荒らしていたクロッチのところだけを破り開いたのだ。

破れ目から、ピンクのショーツが覗く。

「ああ……♡　すごい……♡　可愛い……♡」

茂木さんの指が破れたパンストの隙間に入ってくる。ぷにぷにと薄布の上から割れ目を押される。

「ひっ……!？」

「あれ？　これは僕の唾液だけじゃなさそうですね」

「ちがつ……!」

違う、違う、違う。

そんなわけではない。

疲労と緊張と恐怖とで、身体が勝手に反応しただけ。

私の意思じゃない。欲情してるわけじゃない。

ふるふると首を横に振る。

茂木さんは、私の反応が嬉しくてたまらないというように、目を細めて息を漏らした。

「違うんですか？　こんなに美味しそうな匂いがしてるの？」

「やつ……」

くにゅ……♡

「んくっ……♡」

茂木さんの指が、ショーツ越しに、ぬめった音を立てて私の割れ目に潜り込む。

それだけで背筋にびりびりとした震えが駆け上がった。

「や、ちょ……っ」

「んふ……♡」

「……ッ、あ……♡ あ……♡」

布を食い込ませながら、茂木さんの指が私のそこをゆっくり、ねつとりとなぞっていく。

割れ目の長さを測るように上下に動かして、形を確かめるように押しつけて。それから中指の腹で、くりゆくり♡ と円を描いて、ク

リトリスを押し潰した。

「ひいんッ♡ あっ♡ や、そこっ♡」

一気に全身の毛穴が開いて、身体の内側からせり上がるような感覚にぶわっと汗が滲んだ。

「すごく可愛い声ですね。ここ、好きですか？」

「好き、じゃな、いっ！ んいっ♡」

「じゃあ、もっかい確かめてみましょう」

「あ……！ や、やめ……っ！ ひ♡」

茂木さんの指が、割れ目から少し上。もっとも敏感な、皮からはみ出しかけの私のクリトリスを、ぐっ、と下から押し上げた。

「クリトリスがどんどん硬く、コリコリしてきてる。……ほら♡」

「あうっ♡」

くりゆくりゆくりゆ♡　くにくにくにくに♡　くにゆうっ♡

「あっ♡　や♡　んあッ♡　あ……ッ♡　ああ……♡　あんっ……ッ♡」

茂木さんの指は容赦なく私のクリトリスを捏ね回した。

小さな突起はみるみるうちに充血し、ショーツの薄い布越しにもはつきりわかるほどにぷっくりと勃起上がる。

「ほら、ほら♡　クリちゃん、気持ちいい、気持ちいい、ですね♡」

「う……やめ……てえっ！　うあ……♡　あっ♡　あっ♡

だめなのに、だめなのに――。

指の圧がやさしくも執拗に、勃起しきった小さな突起を挟み込み、しつこく撫でてくる。

くにくに♡　くにくにくにくに♡　すりすりすりすり♡

まだおそらく皮の中に潜ったままのクリトリスが、ショーツの布に擦られてじわじわと剥けてきたのがわかった。

「んひ♡　あう♡　あっ♡　やっ♡　ら、め♡　しょええ……♡」

「んふ♡　クリトリスがぷくぷく腫れてきましたね」

「うあ♡ 言わな、いれ……えっ♡ あっ、あッ♡」

「擦れて傷ついちゃってないか確認してみますね」

「えっ、あっ、まっっ……！」

止める間もなく、茂木さんはショーツのクロッチをぐいと引っ張って横にずらした。

剥き出しにされた割れ目が、ひんやりした外気に触れてひくひくと縮こまる。

「あー……♡ クリ、真っ赤に腫れちゃってますね♡ かわいい♡ まんこもくぱくぱして、お汁が垂れてますよ。ああ♡ すごいな。しやぶりたい♡ クリもまんこの奥もたくさんくちゅくちゅってあげたい♡」

「あ……っ♡ や、やら♡ はずかし……っ」

逃げだしたいくらい怖いのに、茂木さんのえっちな言葉に身体の芯がとろりと溶けそうになる。

殴るなり、蹴るなりして抵抗しなければならぬのに、指一本動かさなかった。

座席で脚を大きく開いたまま、私はぶるりと身体を震わせた。

「ああ……っ♡ この匂い、たまらないな……っ♡」

茂木さんは割れ目を両手の親指でぐいと開き、触れるくらい近くに顔を寄せて、すんすんと鼻を鳴らしている。

「ん、ん……っ♡」

息がかかるたびに、ぞわぞわと全身が粟立つのを感じた。

「クリトリス、皮剥いてちゅっちゅしていいですか？ いいですよね？

ね？ したいしたいしたい……♡」

茂木さんの表情はもう、理性が限界まで剥落してしまった、いやらしい顔つきだった。

それを見た瞬間、本当は「いやだ」と拒否しなければいけなかったのに、私は無意識に小さく頷いてしまっていた。

いいなと思っていた終バスの運転手さんが
私を帰す気ゼロです！

～限界社畜 OL 暗い車庫でおもらし絶頂させられます～

体験版

著者 桜雨ゆか

発行元 桜結び

発行日 2026 年 7 月 29 日

X <https://x.com/sakurayuka317>

連絡先 sakurayuka317@gmail.com